

青森県立高等学校魅力づくり検討会議（第2回）概要

日時：令和5年7月7日（金）

13：30～16：00

場所：県庁西棟8階 中会議室

<出席者>

郡 千寿子議長、高橋 英樹副議長、石岡 由美子委員、大瀬 幸治委員、
葛西 崇委員、香取 真理委員、菊地 建一委員、木村 和彦委員、
里村 智彦委員、中村 佐委員、花松 憲光委員、前田 濟委員、村本 卓委員、
山本 隆悦委員、横岡 千和子委員、吉川 康久委員、米内山 裕委員

1 開会

小坂次長から、挨拶があった。

2 事務局説明

(1) 5月29日全体会及び意見等記入票での主な意見等

事務局から、資料2・3により説明した。

(2) 学校・学科・教育制度等の現状

事務局から、資料4により説明した。

【質疑応答】（質問：◆ / 回答：◇）

- ◆ スクール・ミッションを令和5年3月に策定したとのことだが、いつから公表になるのか。
- ◇ 令和5年4月1日からホームページで公表している。
- ◆ 公表されているスクール・ミッションやスクール・ポリシーは、来年度高校に入学することになる現在の中学校3年生に向けたものという理解で良いか。
- ◇ 中学生に向けたものでもあるが、現在の各校の教育活動も踏まえて策定したものであることから、在校生や保護者に向けたものといった側面もある。

- ◆ 資料4における各学科の志望・志願状況について、近年、志望・志願倍率が減少傾向にあり、定員割れしている学科が多くなっているように見受けられるが、これは、生徒数の減少が影響しているのか、それとも私立高校に流れていることが影響しているのか。
- ◇ 中学校卒業生数が減少していることに加え、私立高校の授業料の実質無償化に伴い、私立高校の入学者数が増加していることも、様々ある要因の一つであると考えている。

3 実践発表「本県高等学校における教育活動の状況」

①八戸北高等学校

八戸北高等学校 種市校長から、資料5により、次のような発表があった。

- 八戸北高校は、昨年度、創立60年を迎えたところであるが、教育方針は創立時から現在まで変わっていない。
- 初代校長の経営理念として、学校の主体は生徒ということで、校舎の中で玄関を一番立派にしている。
- 八戸北高校に校訓はないが、好き勝手にやっても良いということではなく、「自由」であるということであり、教員は生徒に日々「自由」であるとはどういうことかについて、生徒はもちろん教職員も常に考えるべく、様々な場面で折に触れて話題にしている。
- 以前は、理数科が設置されており、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定校として、本県の理数教育を牽引する学校として取り組んできた。現在は、理数科はなく、SSHの指定校でもないが、これまで本県の理数教育を牽引してきた伝統やその教育資産は継承している。
- グランドデザインには、スクール・ミッションやカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーなどを記載しており、本校で育成する力として、「探究力」「突破力」「協働性」、そして校訓がないということで、「見えない力」の4つの柱を掲げている。なお、記載している資質・能力については、生徒の思いを汲み取るため原案を投げかけ、生徒から出された意見を踏まえたものとなっている。
- 単位制の高校として、少人数授業によりきめ細かな指導を行い、進路希望に応じた選択科目が充実している。生徒の多様化が進んでいる今の時代において、単位制は可能な限り個に応じたきめ細かな取組ができる可能性を秘めている。
- 入学当初は、ほとんどの生徒が大学進学を希望しており、令和5年3月卒業生の大学進学率は83.5%となっている。
- 先ほども触れた、本校で育成する力のうち、「探究力」については、1年次は「知る」、2年次は「決める」、3年次は「進む」といったように、様々な人の話を聞き、様々な場所へ出かけていくなど、見聞を深めるための取組を行っており、3年間をかけて探究力の育成に取り組んでいる。
- 「突破力」については、受験に対応できる力を身に付けるため、進路講演会や難関大プロジェクト、メディカルプロジェクトを3年計画で実施している。特徴的な取組としては、難関大プロジェクトが挙げられ、難関大学を目指す生徒が講演会や講習、添削指導、個人面談、グループミーティング等をとおして、仲間と切磋琢磨している。なお、グループミーティングでは、放課後に自分の思いを語り合ったり、難しい問題を教え合ったりするなど、生徒の自主性を発揮する場となっている。
- また、メディカルプロジェクトでは、医療系大学への進学を目指す生徒が、難関大プロジェクトと同様に、様々な取組をとおして、仲間と切磋琢磨している。

②五所川原工科高等学校

五所川原工科高等学校 島元校長から、資料5により、次のような発表があった。

- 五所川原工科高校は、開校して3年目になり、学科構成は普通科が2クラスと工業科が3クラスとなっている。
- 教育目標として、普通教育と工業教育の実践により、主体的に社会の発展に寄与する人材の育成を掲げている。
- 教育活動の方向性としては、普通科と工業科が併設されているメリットを最大限に活用することを心がけており、双方の進路達成の実現に取り組んでいる。
- 進路状況について、令和5年3月卒業生は、五所川原工業高校最後の卒業生に当たり、進学は4割、就職は6割となっている。五所川原工科高校初の卒業生となる現在の3年生のうち、6割の生徒が進学を、4割の生徒が就職を希望している。このうち、普通科の生徒の8割が進学を希望しており、1年生や2年生も高い進学志向であることから、今後、カリキュラムなど改善すべきことが多々ある状況である。
- 就職については、工業高校時代から長年の間お付き合いのある県内外の企業から求人をいただいていることもあり、就職率は100%となっている。
- 工業科は、機械科、電子機械科、電気科の3つであり、いずれもキャリア教育と職業人の育成を共通理念としている。
- 機械科では、県内で数少ない鉄の鑄造実験を行っており、1,000度を超える実習を行っているのは本校だけである。機械科の生徒、教員ともに、その点を非常に誇りに思っており取り組んでいる。
- 電子機械科では、ロボット実習や工場の自動化実習に加え、昨年度までであった情報技術科のカリキュラムを一部取り入れて、ゲームの制作なども行っており、本校の工業科の中では最も人気の高い学科となっている。
- 電気科では、暮らしに欠かせない電気のスペシャリストを育成している。残念ながら、ここ数年は、志望倍率が低くなっているが、地元企業に限らず、県内外の多くの企業から様々な御協力をいただいている。
- 普通科では、教科指導と総合的な探究の時間を活用した探究学習・キャリア教育の両輪で、生徒や教職員と共通理解を図りながら各種取組を進めている。特に、探究学習・キャリア教育では、工業高校時代からの強みであったキャリア教育に加え、工科高校から始まった探究的な学びの融合により、普通科と工業科の生徒が連携して課題研究に取り組み、令和3年度にキャリア教育優良学校文部科学大臣表彰を受賞した。
- 総合的な探究の時間では、縦と横のつながりを意識している。1年生全員が「あおり創造学」の学習やグループワーク、ディベート大会に取り組むほか、2年生においては、普通科は探究学習の発表会、工業科は課題研究に取り組んでおり、横のつながりということで、研究成果発表会を普通科と工業科の合同で開催している。3年生になると、工業科は課題研究に取り組み、課題研究発表会には普通科2年生の代表と職業能力開発大学を招待し、縦のつながりということで、上級学校の学びを生徒が体感する場を設けている。

- 学科併設のメリットとして、まず、普通科の生徒が工業科の専門科目を履修できることが挙げられる。普通科の生徒は、工業科が併設されていることにより、普通科には来ないような求人情報に接することができ、実際に、企業も工業科の専門科目を履修している生徒に高い関心を持っていることから、今後、普通科単独では得られない就職機会が得られる可能性がある。
- もう一つのメリットとして、普通科の併設により、工業科の生徒が普通科で実施する講習や検定を受けやすくなるほか、学科中心の指導から進路指導部が組織的に行う指導、例えば、教員全員体制で行う小論文指導や面接指導が受けられるようになり、工業科の生徒の進路選択の幅が広がる。
- 地域との連携については、地元企業や団体、自治体から多くの支援を受けながら、各種取組を行っている。

<取組事例>

生徒有志が若者の地元定着を目的としたイベントを開催

- ・ イベントの開催に向け、市役所や企業に企画書を持って行き、スポンサーを募り、広告協賛を集めた。それにより、ポスターの作成やビラ配りを行い、今年の1月には五所川原のE L Mショッピングセンターの2階のホールを貸し切りにしてイベントを開催。
- ・ イベントでは、生徒が地域を盛り上げる方法についてプレゼンを行い、地域の企業経営者とのディスカッションを通じ、地域活性化や地元の魅力発信策を話し合った。

→ 西北五地域は人口減少が激しく、地域産業の担い手も少ないという課題がある中で、本校の生徒が問題意識を持ち、生徒が主体となって、このようなイベントを開催できたことことから、今後もこうした取組を行いながら、本校で教育目標として掲げている主体的に地域の発展に寄与する人材や、郷土に対する愛着を持ち、地域を支える人材の育成につなげていきたい。

③百石高等学校

百石高等学校 志村校長から、資料5により、次のような発表があった。

- 百石高校は、普通科2クラス、食物調理科1クラスで、定員はそれぞれ80名と40名の計120名となっており、現在、生徒数は294名で、女子147名、男子147名となっている。
- 通学地域としては、おいらせ町から42%、三沢市と八戸市合わせて40%、十和田市や六戸町、五戸町など、その他の地域からは18%となっている。
- 通学方法としては、おいらせ町に在住の生徒であれば徒歩や自転車で、八戸市や三沢市、十和田市からであれば各方面からの路線バスが多い。最近の傾向では、保護者の送迎が大幅に増えている。
- 卒業後の進路状況は、進学と就職ともに約50%となっている。進学先としては、4年制大学や短大、専門・各種学校など、多様となっており、就職については、35%が県内就職、11%が県外就職で、特に食物調理科の生徒が、大手のホテルやレストランなど、県外に就職している。
- 校訓は「誠実 努力 自立」。物事に「誠実」に取り組み、自分の目標に向かって「努力」を続け、社会的・精神的に「自立」をする人を目指している。私自身も人生の目標としている信条である。スローガンは「発見・挑戦・実現～君の輝く場所がある～」で、本校のキャリア教育の一つのキーワードにもなっている。
- 本校の長年のキャリア教育が認められ、平成27年度にキャリア教育優良学校として文部科学大臣賞を受賞した。

キャリア教育について、1年生では、自分の良さや可能性を「発見」し、2年生では、様々なことに「挑戦」し、3年生では自分の夢を「実現」するということで、ステップアップをしながら、自分の目標の実現に向けて取り組んでいる。

具体的に、1年生は、大学生と語ったり、大学や企業の見学に行ったり話を聞いたり、進路ガイダンスを行ったりと、自分にどのような適性があり、どの進路に向いているのか、何をやりたいのかということ「発見」している。

2年生は、ビジネスマナーを学んだり、インターンシップで企業に行ったりすることで、適性も見極めながら、自分のやりたいことを見つけ、それに向かって「挑戦」している。

3年生は、進路説明会をとおして、進路実現には欠かせない保護者との共有を行っている。保護者と生徒の希望がなかなかマッチングしないこともあるが、きちんと同じ方向に向かって、保護者と一緒に応援していける体制を取れるよう努めている。また、大学・企業見学を実施するとともに、全教職員による面接指導を行うことで、様々な人と接しながら、経験を積んでいる。さらに、進路が「実現」した生徒は、下級生に進路活動の発表会を行っている。
- 食物調理科は、青森県内の県立高校で唯一の学科である。卒業と同時に調理師の資格が取れることが大きな強みである。

- 昨年、本校生徒の出身中学校を訪問した。その中で、「百石高校の普通科は何を売りにしているのか、どういう特色があるのか」ということをよく聞かれた。進学に特化した普通科が県内にある中で、本校もしっかりとアピールできる「柱」をつくっていけるよう努めているところである。
- 普通科の主な取組として、学校設定科目「新聞を読もう」がある。生徒は一人一人に配布された新聞を読み、その中から自分が気に入った記事をピックアップし、それについて調べたり、感想を書いたりする。「新聞を読もう」の授業を行うことで、新聞に用いられる言葉や漢字に触れ、現代社会の中で使われている言葉や漢字を読む力、書く力、その文章を理解する力、また、世の中の動きや地域の文化、歴史を知る・感じる・考える力を身に付け、新聞記事を読むことにより視野を広げていく、このような目的を持って取り組んでいる。
- 食物調理科の主な取組としては、おいらせ町内の保育所や小・中学校に出向いて、食べることや栄養の大切さを伝えるなど、食育活動を行っている。また、おいらせ町との連携事業として、おいらせ町の成人式（現在は二十歳の記念式典）において、約200食の料理をビュッフェ方式で提供するなど、3年生がこれまで培ってきた集団調理の技術を発揮できる、集大成として取り組んでいる。
- 外部講師として、業界随一の方々に来ていただいていることもあり、昨年度行われた「さんフェア2022」の「全国高校生クッキングコンテスト」において、文部科学大臣賞を受賞した。
- 新聞等でよく話題になっている調理クラブについては、生徒がお店を出し、経理やメニューなど様々なことを一から考え、料理を提供する「高校生レストラン」の活動を、これまで7年間地域と密着しながら行ってきた。
- おいらせ町では「百石高校魅力アップ推進協議会」を組織しており、町から様々な支援をいただいている。塾の半額補助や模擬試験の補助といった学力向上支援のほか、英検や漢検、その他調理師に関する検定試験などの受検料助成もいただいている。また、大学のオープンキャンパスへの参加に係る経費の助成といったキャリア教育支援や新聞購読支援もいただいている。こうした支援もあり、今年、1名の生徒が弘前大学に合格することができた。このほか、学習支援アプリの年間利用料の助成やバス通学費補助、町長とのフレッシュトーク、広報おいらせやInstagramによる効果的な情報発信など、様々な支援をいただいているところ。なお、ボランティア活動についても、町と連携しながら積極的に取り組んでおり、自己有用感や自己肯定感の向上につながっている。
- 本校の教職員は生徒一人一人を大切にし、生徒は入学して良かったと思い、保護者は入学させて良かったと思い、地域の皆さんはうちの（町の）学校だと自慢できる、そういう学校にしていきたいと思っている。
- （も）目標を持って取り組む心、（も）物事を幅広く捉える心、（い）一歩前に踏み出す心、（し）しなやかで健康な心、これらを「ももいし心（じん）」と総称してグランドデザインに掲げており、今後も、地域とともに人材の育成に向けた活動を進めていく。

4 意見交換

(1) 5月29日全体会及び意見等記入票での主な意見等

委員から、次のような意見交換が行われた。

- 将来高校生になる子どもたちが、この先、社会で活躍することを考えると、今からかなり先の将来を見据えなければならない。このため、今の社会を見るのではなく、10年後、20年後の社会の中で、どのような資質・能力が求められるかという視点が大事。

この先、人口減少が進み、人手不足を補うために外国人労働者を受け入れる社会、また、ITやAI、ロボット系などの活用による効率化や生産性の向上が求められる社会になっている可能性が高いと思う。こうした社会において必要となるのは、知識や技術はもちろんのこと、一人で大きな生産性を上げるための核となるような人材や人をまとめるリーダーのような立場になっていくことを考えると、やはりコミュニケーション能力が不可欠であると考え。コミュニケーション能力を身に付けるための教育を高校段階から行うことが必要。

また、これから様々な新しい技術が開発されていくことを考えると、例えばロボットの専門的な職業に就くということではなく、どのような職業に就いたとしても、一人の人間が多くの仕事量をこなし、様々な新しい技術を有効活用するための基本的な知識を身に付けることが大事なのではないかと思う。

- 本日の3校の校長先生からの実践発表によると、総合的な探究の時間において、社会を知るという観点で、高校において実践的な取組がなされているとのことであり、こうした取組は、課題発見・解決能力を高める上で、ますます必要になってくるとともに、様々な教育効果をもたらすものだと思う。

総合的な探究の時間における学習は、地域への愛情が育まれるきっかけづくりになるとともに、首都圏に出て行ってしまった高校生や大学生が地元に戻ってくる動機づけになるものと考えているため、こうした学習は必要だと思う。

五所川原工科高校から紹介のあった学科横断的な取組や、前回会議でも話題に上がったSTEAM教育などは更に広げ、深めていくことが求められているのではないかと。

また、キャリア教育は、職業教育を主とする専門学科だけではなく、普通科においても必要だと考えており、五所川原工科高校では、既に一部実践されていることが分かり、他の高校においてもキャリア教育を進めてほしい。

本県の新規高卒就職者の離職率は非常に高く、百石高校から紹介のあったインターンシップの取組は、こうした現状を克服する一つの方策であるため、こちらも他の高校においても行われれば良いと思っている。

- 魅力ある高校、人が集まる高校にしていこうと考えたときに、3つの側面からの攻め方があると思う。1つ目は、カリキュラムを含めて、学校全体としてどういう生徒を育てたいかという視点で、学校全体の取組で魅力を出していく方法。2つ目は、部活動や特別活動、地域活動の充実により、学校全体を魅力的なものにしていく方法。3つ目は、学校そのものというより、地域が生徒を育てるという視点で、食や住環境などにより、魅力をつくっていく方法。

一番取り組みやすいのは、おそらく学校全体としてというよりも、部活動や特別活動から攻めていき、学校や地域を盛り上げるような方法だと思う。

また、本県では移住促進に係る取組を行っており、全国からの生徒募集による入学生に対しては、その家族の移住を支援するなど、移住促進の取組と組み合わせる方法も考えられる。

高校の魅力づくりに向けて、様々な方法があると思うが、具体的にどのような方法があるのか、どのように攻めていくのかなど、具体的に考えていく必要がある。

- 私の職場の若手記者を見ていて感じるのは、聞く力を持っているか、また、聞いたことに対して自分の考えを持ち、思いを相手に伝えられるかということであり、聞く力や伝える力といったコミュニケーション能力が大事であると思う。

また、地元の新聞社として感じることは、子どものうちから自分が住んでいるところがどのような風土で、どのような歴史や食文化があって、どのように発展していったのかなど、地元のことをもっと知ってもらいたいと思っている。

さらに、デジタル化は避けて通れないものであり、IT人材やデジタル人材の確保が必要である。

- AIが発展してきて、今ある職業がAIに奪われてしまうのではということが言われているが、AIにできないことができるのは私たち人間の強みであり、持っている知識をつなぎ合わせて、対応できる柔軟性や対応力、また、持っている知識を合わせることで新しいものをつくり出すような力、こういった力を持った人材が少ないと感じている。

最近では、スマホやゲームでばかり遊ぶ子どもが増加しており、持っているものをかき集めて、新たな遊びを自分でつくり出すとか、自分の世界を構築するという経験がない子どもが増えている印象を持っている。やはり高校でもそういった部分を鍛えて、新たなものをつくり出す力や、柔軟性、対応力を持った人材をつくるのが大事。

- これからの本県高校教育に求めること、魅力づくりに必要なこととして、生きる力が基盤にあると思う。高校教育を取り巻く課題に対応し、青森県の全ての高校生に生きる力を育むとともに、各校の特色を生かして、コミュニケーション能力や社会課題に適応していくような力などを育み、それぞれの場面で活躍できる人材を育成していくということになろうかと思う。一旦、このようにまとめてさせていただいた上で、分科会での議論を踏まえ、改めて審議して、最終的な結論を得ることにしたい。

本日皆様からいただいた意見については、事務局で改めて整理し、次回の第1分科会の資料として準備するとともに、検討会議委員や地区部会委員にも共有していただきたい。

(2) 第1分科会での調査検討に当たって必要な視点

事務局から、次回の第1分科会で配布を予定している資料について説明した。

【質疑応答】（質問：◆ / 回答：◇）

- ◆ 学校現場の教員は、子どもたちにどうなってほしいのか、どういうことを目指して教育をしているのかなど、それぞれ思いがあると思う。このため、分科会でフィロソフィーを固めてから検討を進めるのではなく、保護者はどのような教育、もっと言えば、どのような教員と生徒とのインタラクション（相互作用、相互交流）や学校の取組を望んでいるのか、企業はどのような生徒を望んでいるのかなど、それぞれ話を聞いた上で、検討していきたい。特に、学校現場の教員の意見を聞きたいと思っているがどうか。
- ◇ 資料2の参考資料1ページにもあるとおり、検討会議における魅力ある県立高校の在り方の検討に当たり、これまでの高校教育改革の検証として、高等学校教育に関する意識調査を実施するというところで、前回会議でも説明したところ。意識調査では、中学生・高校生とその保護者、小・中・高校・大学教員、企業などを対象としており、集計データは今後開催される検討会議や分科会においてお示しすることとしている。

委員から、次のような意見交換が行われた。

- 人口減少という課題を解決するためには、働く場所をつくることが大事であると思う。スーパーマーケットで多くの人が食料を購入する光景を見ると、食料を生産、提供することは働く場所をつくることにつながるものと考えられる。例えば、第1次産業の就業人口の増加は、デジタル技術やAIの活用で、第2次産業や第3次産業の就業にも波及し、本県に人を集めることになる。魅力ある高校づくりには、そういった産業の就業人口といった視点も必要ではないかと思う。
- 第1分科会で必要となる視点として、地域と連携した課外活動や特別活動などの取組事例について紹介してほしい。

- 県立高校の志望・志願倍率は減少している一方で、私立高校は、就学支援金の支給により授業料が実質無償化となったこともあり、定員が充足している高校はないものの、受験者数や1次志望倍率は確実に増加している。

県立高校と私立高校で授業料の差がなくなってきたことも踏まえ、両者を比較し、分析していく必要があるのではないかと懸念している。

また、現在行っている県立高校教育改革の取組や効果をきちんと検証した上で、将来の高校教育改革について考えていかなければ、どんなに新たな取組を行っても結果が出ないままに終わってしまうのではないかと危惧している。

- 高校生が大志を抱けるよう、また、世界に羽ばたいていけるような環境をつくらなければならない。本県の企業でも、世界に出ようとしている、あるいは世界に出ているところも多いので、そういった心も育てなければならない。

デジタル人材が必要との意見もあるが、それは一つの手段であって、手段と目的を履き違えているような気もするので、その辺をしっかりと押さえながら、今後、魅力ある高校をつくらなければならない。

- 本検討会議は、高校の魅力づくりについて検討する会議と認識しているが、先程の実践発表を聞き、3校とも魅力的で素晴らしいと思った。今でも十分魅力があるのに、更なる魅力づくりというのは少し欲張りな気がする。

県立高校でも調理が学べるといったことは、自分の地域にある高校でなければ知らないのが現状であり、自分の地域にある高校の中からしか選択しない中学生やその保護者もいるため、そうした現状も踏まえながら考えていかなければならない。高校の魅力づくりについて検討するだけでなく、今ある魅力を生かす方法も模索する必要があるのではないかと懸念している。

私は子どもが4人おり、そのうち3人は既に高校入学を終えているが、3人のうち2人は私立高校を選択した。通学が大変で、部活動や課外活動ができないため、私立高校の寮に入る選択をした。もう1人は、フェンシングをやりたいということで、今別町から下北の県立高校に進学しており、自分の地域外でも魅力ある高校には行くもの。ただ、アパートを借りて一人暮らしなので、金銭的な負担が大きいのも事実。せっかく魅力があっても通学できない高校も多いと思うので、通学できる環境づくりについても検討してもらいたい。

- 私が学校現場にいたとき、「即戦力というのは、最先端の技術や技能を身に付けていることではない」と生徒に言ってきた。今身に付けている技術は、1年後には古くなるため、即戦力というのは、新しいことを常に学ぶ態度、意欲、それを身に付けて社会に出ることだと思う。

先程の実践発表を聞き、3校とも非常に魅力ある高校だと感じた。これから高校の魅力づくりについて検討していくわけだが、今ある魅力や新たな魅力をいかに発信していくかが大事。

高校卒業後の人口流出について考えていかなければならない。高校卒業後に最も県外に出るのは、工業科の生徒である。以前、勤務していた工業高校で、生徒にアンケートを取ったことがあるが、1年生のときは5割が県外志向、2年生になると6割が、3年生になると7割が県外志向という結果になった。身に付けた技能や力を試してみたいといった理由が多く、そういう思いが強くなればなるほど県外を志向しており、このことに対してどうやって対策を取るのかを考えていく必要がある。青森県の魅力、生活、自然、そういった副次的な対策もあるが、本質に対して対策を取らなければ、県外流出への対策はなかなか難しいと思う。

- 本県では普通科が約6割を占め、全国でも約7割は普通科が占めている状況。市部に複数の普通科がある場合、中学生がどの普通高校を選ぶかといったときに、やはり入試のランキングで選んでしまうのが現実。それぞれの普通科にどのような特徴を持たせるのかということは、各校が努力すべきものだと思うが、国においても普通科改革が進んでおり、普通科の中でも学際領域に関する学科や、地域社会に関する学科を設置していくという動きもあるため、本県においても普通科の特色を出すために、ここの高校ではこういうことができるというのがネーミングで分かるような学科をつくっていくことも一つの手なのではないか。

- 自分の地元では、高校生が地域に出て、地域の課題を探って、1年間で何らかの成果を出すというような活動をしているが、そういった活動をとおして、1年間で生徒が成長する姿を見てきた。

このように、地域に出て、様々な人と関わりを持ち、今地域で何が課題となっているのか、それを自分たちで掘り下げて、1つでも解決に導いていくような活動をどんどん増やしていければ良いと思う。地域の中で高校が一つの役割を果たしていくことも重要。

先程、通学できる環境づくりについて意見があったが、自分たちの地域の中に通学できる学校があることはとても重要だと思う。

この先、人口減少が進行していく中、県立高校と私立高校との関係についてももう少し真剣に考えていった方が良い。

- 高校の魅力づくりについて、子どもたちの夢や志の実現に向け、先進的な教育構想や教育制度等を取り入れていくような方向で議論が進んでいくと思いつつも、私は「魅力」について全く違う観点で考えている。

学校現場を離れて10年が過ぎたが、自分の地域の状況を見ていると、魅力ある学校というよりも、子どもたちに対して、保護者は何を望んでいるのかということ強く感じている。青森県立高等学校教育改革推進計画基本方針に高校の役割が記載されているが、これに尽きると思う。端的に言えば、自分のことは自分でできるという「自律」と、自分で稼いだお金で生活していくという「自立」、これができる子どもを高校でしっかりと育成してほしいということではないか。

近年、小・中学校における不登校児童生徒の増加が問題となっている。また、友達とうまく人間関係をつくれな、新規高卒就職者の離職率が高い、ひきこもりの増加といった問題もある。こうしたことを考えたとき、「魅力」というのは夢の実現というようなことばかりでなくて、全ての子どもたちが自分のことは自分ででき、ちゃんと生活していける、社会の一員として役目を果たしていけるような高校をつくっていくことではないかと考える。このようなことがうまくいっていない要因の一つには教員不足があると考えている。

- 検討の視点をいくつかお示しする。

- ① 学校の充実に向けた取組の現状・方向性

次回配布予定のグランドデザイン等を基に、各校の特色ある教育活動の現状を確認しながら、今後、より魅力ある高校になっていくためになっていくために各校が共通して取り組むべきこと、各校の特色を高めていくための方法等について検討していただきたい。

- ② 各学科の成果・課題と今後の方向性

各部長からの意見発表をとおして、現状の成果・課題を踏まえ、今後の各学科の充実の方向性について、検討・整理していただきたい。

- ③ 各校種や地域、関係機関等、様々な主体との連携

資料4で事務局からも説明があったとおり、重点校や拠点校など各校との連携や、地域、関係機関等、様々な主体との連携などの取組状況を確認しながら、今後の方向性について検討・整理していただきたい。

- 各校の特色を生かした人材育成が既に進められており、この方向をより良い形で魅力あるものにしていくことが大事。このため、第1分科会において、中高一貫教育や単位制、全国募集等の教育制度の方向性についても調査検討をお願いしたい。

5 閉会